畑山博

講談社

母を拭く夜

昭和四十七年十二月八日　第一刷発行

著　者　畑山　博

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)／振替東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社黒岩大光堂

定　価　五八〇円

©畑山　博　昭和四十七年／落丁本・乱丁本はお取り替えします。

Printed in Japan　0093-126265-2253 (0)　(文1)

目次

母を拭く夜　7
芽の墓場　99
くるまいすの人魚　147
一坪の大陸　189
あとがき　244

装幀＝駒井哲郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母を拭く夜

母を拭く夜

1

十三歳の母は、浅い歯形のある下唇をつき出し、それは少しぬれている。ぬれながらぴくぴく動いている。板壁の隙間がすっかり雪で塞がれてしまったのだろうか。風の音が静かになっている。かすりの綿入れの中でまるめている背も、耳の後ろも、寒い。ひどく寒い。もんぺの膝をこする掌だけが汗ばんでいる。

いろりを囲んだ少女たちは、思い思いにあぐらをかき、手の先とほっぺただけを赧く染めている。どこかしら栗の実の渋皮に似た臭いがする少女たちの息は、いろりの熱気に押し戻されて、いつまでも煙出し穴の方へ立ちのぼってゆけない。少女たちのうなじに、まだうぶ毛の濃く残る口のまわりに、生温かく漂っているだけだ。

十三歳。部落の同い年の少女ら八人は、互いに息の臭いが嗅ぎ分けられるくらい近く身を寄せ合っている。たきぎの中に松やにのこぶでも混じっているのか、隅の方の一ヵ処だけときどき激しい音をたてて燃えあがる。

炎と濃い煙をへだてたいろりの向う側に、少女たちと同じ派手なかすりの綿入れを着た世話(せわ)

婆が、ゆっくりと藁くじを手の中でもんでいる。藁くじの根元に結えつけた茜や紺の糸の端が、筋くれだった老婆のこぶしからもれて見える。

煤けた天井からぶら下がっている裸電球は、わざとなのかきれているのか、灯がついていない。いろりの炎を背にしてふり返ってみる土間も、親子の牛を飼っている隅の丸太の柵も、神棚も、ほとんど見分けられないほど暗い。ときどき、坐っている少女たちの顔の高さほどに炎を噴き上げるいろり。あまり広くない家の中のそんな執拗な暗さは、もしかすると、二重に戸を閉じている建物の外に展けているはずの白々とした雪明りを、ふとぼくが想像してしまうせいかもしれなかった。

毎年、大晦日に一番近い大雪の日、山形県温海町北浦では、十三歳になった少女が全員部落外れの世話婆の家に集って藁くじを引く。同じ印のついたくじを引き当てた者同士は、藁くじ姉妹の契を結んで、生涯その約束をつづけようと誓い合う。その話を、ぼくは、子どものころたった一度、父から聞かされたことがあるだけだった。

敗戦の二年前。荒川の下流の堤防べりにしがみつくようにしてあった軍靴工場の社宅にぼくたちはいた。乾燥しきって、きびがらのお化けみたいに見える廊下の柱に、虫籠が一つ吊るされていた。油蟬の鳴き声が、障子にやかましくはじけていた。それなのに、テーブルの上には真白い布が掛けられ、鏡餅が二つ重ねてのせられていた。

一歳だった凉子は、記憶のかけらも残っていないと言う。三歳になっていた笑子は、母の到

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

着の日の出来事を、どんな細かなところまでも、ぜんぶ思いだすことができると言って目をうるませる。そうして五歳になったばかりのぼくは、母の持ってきた荷物の中から出された鏡餅をげんこで叩き落とそうとして、何度もそうしようとして、後ろから抱きとめられた記憶があるだけだ。

——おおみそかに一等近い大雪の日なんて、どうやって前からきめちまえるんだよ。よう。よう。よう——

石鹸とたばこの臭いの混じった父の胸の臭いにむせかえり喚きつづけたときの、熱い舌の感触が、わずかに残っているだけだ。

部屋の隅に置いてある扇風機の風が、母の身体に掛けてある新しいシーツの裾をたたいている。寝息のように胸の部分を波立たせ、ついさっき笑子が櫛でとかしてやったばかりの母の髪をほつれさせている。オキシフルの臭いを含んだ単調な風は、母の額ににじんでいる汗を蒸発させるには弱すぎるのだろうか。青白い螢光灯の光の下でぬれている母の顔の表情はもう動かない。

汗と言ってしまった。こんなぐあいに汗を浮べながら眠っている母の顔を、よく見たものだ。例えば昼間、ベランダに干したふとんを叩きながら、ひょいと横になって眠ってしまうと

き

――どれ寝ようかな、どっこいしょだよ――

はたきの柄を枕代りにして、そんなひとりごとをつぶやいたりしたときのあの母の顔によく似ていた。

ふしぎにそこだけ皺の少ない額にも、黒ずんだ頬や首すじにも、目の下のくぼみにも、その水滴は付着していて乾かなかった。もうさっきから何度ぬれタオルで拭いただろう。母の肌が乾くはずのないのは当然なのに、ぼくは苛立っていた。いや、もしかするとぼくは、そうやってタオルでぬらしてやらないとたちまち青じその枯葉みたいに萎んでしまいそうな母の肌の感触に苛立っていたのかもしれなかった。

単調な扇風機の風にどんな乱れが生ずるというのだろう。母の身体のあちこちが、ときどきかすかに痙攣して見える。そのたびにぼくは、そろそろ固まりだした母の身体の奥の方から、ふいに小さな骨折の音が聞こえてくるような気がしてならなかった。

それが、ガラス戸に寄りかかってベランダを見ている笑子の指の音だと分るまでに、ずいぶん時間がかかった。おととし三十を越してから急に胴まわりが太くなった笑子は、片手を紺色のワンピースの腰に当て、片足の爪先を立てていた。

「二晩眠っていないんだから、少しでも寝ておいた方がいいんじゃないか……」

母を拭いていたタオルで首すじの汗を拭こうとし、ふと気がついて洗面器の中に戻す。笑子

は何も答えなかった。爪先を立てていた足を畳に下ろし、片方の足と替えただけだった。ぼくはまた洗面器の上でタオルをしぼった。蒼黒い母の顔を拭いてしぼるたびに、じわじわと冷たくなってゆくようなタオルの感触。いつの間に舞いこんできたのか、脚の長い、ふつうのより数倍も大きな蚊が、螢光灯のまわりを飛びはじめた。

「湯をわかし直そうか」

ぼくはタオルを冷めた湯の中に落とし、洗面器を持って立ちあがった。枕元の盆に二本並べて立てた線香の煙が大きくゆらいだ。寝不足の脚は、筋肉の中ににかわでも注射されたようにこわばっていた。母のふとんのわきを通ってベランダに出るとぼくと入れ替りに、笑子がガラス戸のそばを離れた。

「いいの？　そんなところから水を棄てちゃって」

笑子の声を遮るように、通りの方でクラクションが鳴った。つづいてサーキットのスタートみたいに騒々しい車の排気音。終電車がたった今行ってしまったのだろう。伸び上がって、コンクリート塀の向う側を覗くと、地下鉄駅前のタクシー乗り場には、もう一台の車も残っていない。ルンペン帽子をかぶった屋台のおでん屋が、七輪の残り炭をバケツの水の中に放りこんでいるのが見えるだけだった。

ぼくは、ベランダの手すりに肱をのせ、タオルをしぼった。関節に力をこめて、いくらしぼってみても、下の路地に水のはねる音がしない。いや、あんまり肱を立てすぎたので、せっか

くしぼり出した水が腕を伝って肱の方へ流れだしていたのだった。
「地下鉄の最終が行ってしまったな」
「タクシーの音が一度にしたものね」
台所の流しの前に立って笑子が言った。腿の太さとあまり変らないふくらはぎを、片方の足の爪先でかいている笑子を見ながら、ふと、そうだったなと思う。地下鉄駅が出来た翌年彼女は結婚して出ていったのだった。
みずえたちは、明日何時に来るんだって。うちの亭主は寝起きが悪いから頼りにならないのよ。あの子はだからと、笑子はやかんをのせたコンロに火をつけながら言った。
「凉子はやっぱり来ないつもりなのね」
どうだろうなと言い返してみるだけのことが面倒くさくて、ぼくはふり返らなかった。
七輪の炭をぜんぶ水の中へ放りこんだ老人は、バケツを下げて車道の方へ歩きだした。地下鉄駅の建物の斜め前。いつも屋台を置く場処から数歩の間、まるできっちりと足型ができてしまった上を歩いてゆくような後姿。ゆっくりとぼくは手すりから身体を離した。
「凉ちゃんの依怙地さにもまいってしまうわね。でも仕方ないのよね。最初にすれ違いの種をまいたのは、お母ちゃんの方だったんだから」
太い膝を母のふとんの縁にのせて坐った笑子が言った。
「でも、やっぱりこのさい悪いのは凉ちゃんの方だよね。ね、そうでしょ」

笑子は、凉子と鄭のことに関して母がとった態度のことを話しだそうとしているらしい。が、ぼくは、まだぼんやりとさっきの記憶のつづきを考えていた。

敗戦の二年前の夏、結核で死んだ前の母の後へ山形からやってきた母は、翌年の春から軍靴工場の女工として働きに出るようになった。あまり身体の丈夫でなかった父が、わずか半年間新しい母と暮らしただけで、すぐまた胃癌で死んでしまったからだった。

同じ社宅に住む国防婦人会の世話役の老婆のところに、昼間ぼくたちは預けられた。凉子は新しい母になつかなかった。ぜんぜんなついたことのない凉子が、ある朝、泣きじゃくりながら母の後を追った。

——凉ちゃん。凉ちゃん。遅刻になるからな。かんにんな。なして、そんなに泣くんだってば——

必死にすがりつこうとする凉子の手をふりきって駈けだす母の背に、バスケットもぞうり袋もみんな叩きつけてやりたかった。凉子は、抱きとめようとする老婆の腕をふりほどいて、玄関の土間を這っていった。敷居をのりこえて外まで出る力はなくて、顎だけ敷居の上にのせ、激しく泣いた。だぶだぶもんぺの腰に手を当てて何度もこっちをふり返りながら、それでも母は走って行った。凉子が重いはしかになって最初の発熱をする日の朝なのだった。

扇風機の風は、母の身体に掛けたシーツの端を、あいかわらず激しくばたつかせている。ここからは母の髪のほつれは見えず、笑子の、そこだけ子どものころの面影を残している額のほ

つれ毛が見えるだけだ。笑子は背を屈めて、手の甲で母の額を押さえた。病気の子どもの汗でも拭うようにゆっくりとその手を左右に動かした。部屋の中に充ちているオキシフルの臭いが急に濃くなった。

「涼ちゃんは、二言目には、お母ちゃんのことパセチック病だなんて言ってばかにするけどね、でも、私はそうは思わないの」

「……」

「空襲警報のときのこと一つとったってそうなのよ。軍靴工場の社宅の奥の部屋に、防空壕が、ほら、あったでしょう……」

防空壕のことを思いだせないぼくは、生返事をしながら彼女を見返しただけだった。

「ぜんぜんばかみたいな話だけれど、あのころは、みんなそうだったのよね。畳を二枚持ちあげちゃってさ、縁の下に四角い穴をただ掘っただけなのよね。本当。あんなところへ避難して焼け死なないですむのは、瀬戸物でできたたんたん狸の置物くらいなもんよ」

「……」

「警戒警報のサイレンが鳴るたびに、お母ちゃんが仕事を放っぽりだして帰ってきたこと憶えてる？」

そのことなら、涼子がはしかになった朝の記憶と隣り合わせの感じで強く残っていた。

「私と涼ちゃんと並べて二人背負っちゃってさ……で、兄貴の手を引っぱって、電車に乗って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com